

「バーの扉」*ススキノ編・中編 Fight (f)or Flight

札幌市医師会
華岡青洲記念病院

はなおか けいいち
華岡 慶一

私の苦手な人間は、「想像力を欠いた人間」だ。自身も普段から「もの」の解釈には、できるだけ多面性に配慮しようと心がけているが、これがなかなか難しい。自分の心の状態と、相手の心の状態（価値観・方法論）が関係する。議論が噛み合わない主張をする人の答えは、すでに決まっている。自分の都合（褒めてくれるスポンサーの利益）に合うように。それは、スポンサー側の「ピグマリオン効果」であり、本人側の「自己願望の成就」である。人類は、進化論的に、他者に対してマウントをとり、いかに自分の遺伝子を残すか（進化の最適戦略）に腐心してきたのだ。

社会に出てしばらくしてから、民主的合意形成の難しさを痛感するようになった。議論に基づいた弁証法的手法では、無能（空論）に引き寄せられ、止揚命題は空疎化した。

医学領域では、デカルト以来、因果律に基づいた「唯物論的科学」・「物質（要素）還元主義的科学」は多数派だ。

私は最近、従来の因果律的科学に対して「非因果的連関の原理」・「量子もつれとシンクロシティ」は、未来の可能性と考える。そのためには、「観測する側（認識）」と「観測される側（対象）」つまり「精神」と「物質」を統べる理論体系の構築が必要だ。

この世の本質を追求する真の科学研究者とは、「たったひとつの疑問（本質的テーマ）を生涯考え続けられる人」のことらしい。私には、その「能力」も「胆力」も「興味対象（量子生物学については全く無知だった）」もなかったので「宇宙飛行士」に憧れた。結果、私の選んだ道（循環器急性期医療）では、目前の問題にすぐさま対処しなければならない。だから、今に至るまで、成立しない会話（合意を旨さない議論）に意味はない（J・J・ルソー）と思っている。果たして、我々は、進歩しているのだろうか？

今、私がいると感じている世界は、あたかも、顕在意識と潜在意識の間を行き来しているかのようだ。夢幻／潜在意識／想像界が右脳の夢なら、現実／顕在意識／象徴界と感じているものは左脳の夢なのではないか？ 最新神経科学研究によれば、我々の判断（情報処理）の95%が潜在意識で処理されているという。また、顕在意識において、自分自身が「愚か」なのか「無知」なのか、「いずれでもない」に確信を持てる人間は、一体どれだけいるのだろうか（ダニング＝クルーガー効果の正と負）。現状を見ても、状況は深刻である。Twitter（最大140字）は——文章リテラシーに依存しないで——読めた気になれる限界点であると言われている（それでも日本人の1/3が実際は読めていないという統計もある）。結局、個人の認識と対象の関係は——カントを引くまでもなく——対象が本人の認識（能

力）に従うのだ（自分の能力通りの解釈に収斂する）。歴史を振り返ると、それをメディアが悪用して大衆を煽り、衆愚政治（民主主義）を生み出す構造は、新聞時代も、TV時代も、ネット・SNS時代も基本的には変わらない。寧ろ、衆愚が——隅々まで炙り出されて——発信するようになった（自分も例外ではない！）。それは活字でも映像でも——新聞・書籍でも映画・TVでも——Twitter・SNSでもYouTube・TikTokでも同様だ。時代と媒体は変化しても人間の能力（リテラシー）は限界が自ずと規定されている。

個々の関わり方の観点からは、リテラシー能力の異なる関係の議論（Fight）は、お互いの益にならない。そんな時は、「逃走（Flight）してもいい」と気付いた。その時に注意しなければならないのは、自分の「心」の状態だ。心は取り巻く環境によってしばんだり、膨張したりする。負の感情（嫉妬・エゴの感情）の影響を受けると、心のあり方に厄介をもたらす。それは様々な形態で心の隙間に忍び込み、内部に染み入る。結果、未来からのメッセージ（全ての記憶・記録が存在している「ゼロ・ポイント・フィールド」からの）はネガティブなものとなる（負の引き寄せの法則）。

院内会議報告が届いたのでこれ幸いと、中座した。報告内容は予想通りだった。瞬間、私の体は無性に酒を欲した。強い酒を。これまでもこんな時は酒の力に頼ってきた気がする。それで失敗も成功（成長？）もした。果たして今日はどちらなのだろう？ その時私は、書を捨て街へ出ることを選んでしまった（否、会議を捨て「バー」のある街へ）。車を呼んで36号線を西上し、狸小路の西の外れにあるワインバーへ入った。シャルドネで、マッシュしてないポテサラとエビフライをタルタルソースで頂いて、強い酒を所望した。しかし、グラッパもマールもジンもないという。シングルモルトの気分ではなかった。仕方なく支払いを済ませて外へ出た。3条通りを東へ下りながらある地下のバーの前に来た時、そこで起きた昔の妙な話を思い出した——それは、波長のあわない人間に、「干渉」した結果（負の感情に任せて）、不協を発したことの当然の帰結だった（心と脳は「藁クズ」で一杯だった）。「さすがにここは無いな」（デジャブー）と思った時、ふと、頭に「ある考え」がよぎった。もしか、何かに導かれているのか？ とすれば、今日の演出家は、タヌキではなく、キツネなのか？ ……こうなったら久しぶりの「ススキノ冒険物語・バーの扉の向こうのファンタジー・ランド」巡りか……。男子が大人になったら「バー」は、チャンドラーを引くまでもなく、「Fantasy」の世界であり、扉は『別世界への入り口』である。だからこそ探偵もバーにいる。この冒険には、いくばくかのルールがある——それは、縄張り最低限の決まりごとだ。まずは、心が収縮している時は、知らないところには近づかないことだ。また、良いバーは外れにある（ハズレではない）と相場が決まっている。そこで、キツネを探して南下することにした。ススキノ横断である。この判断が「吉と出たか凶と出たか」は後編で。